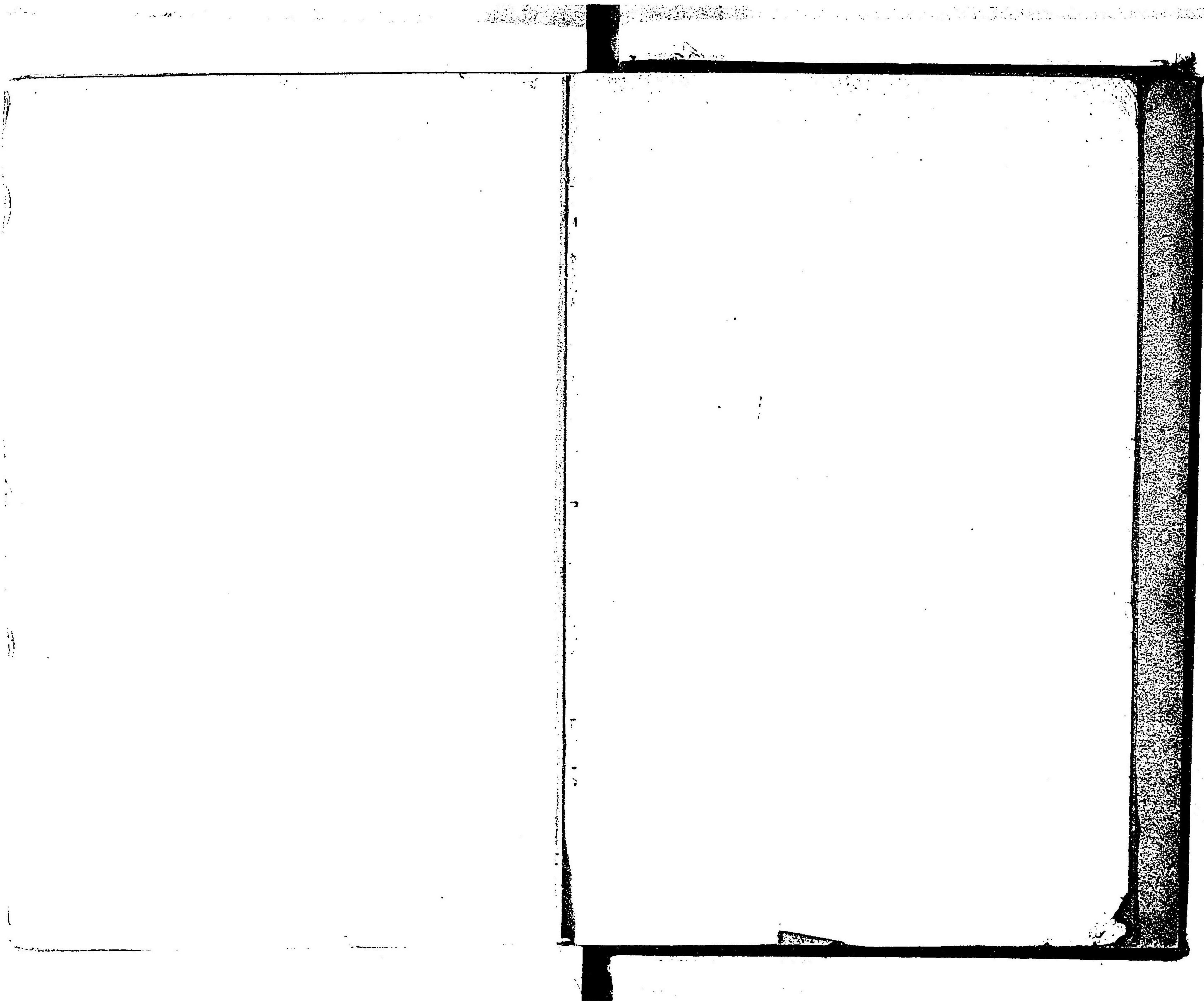
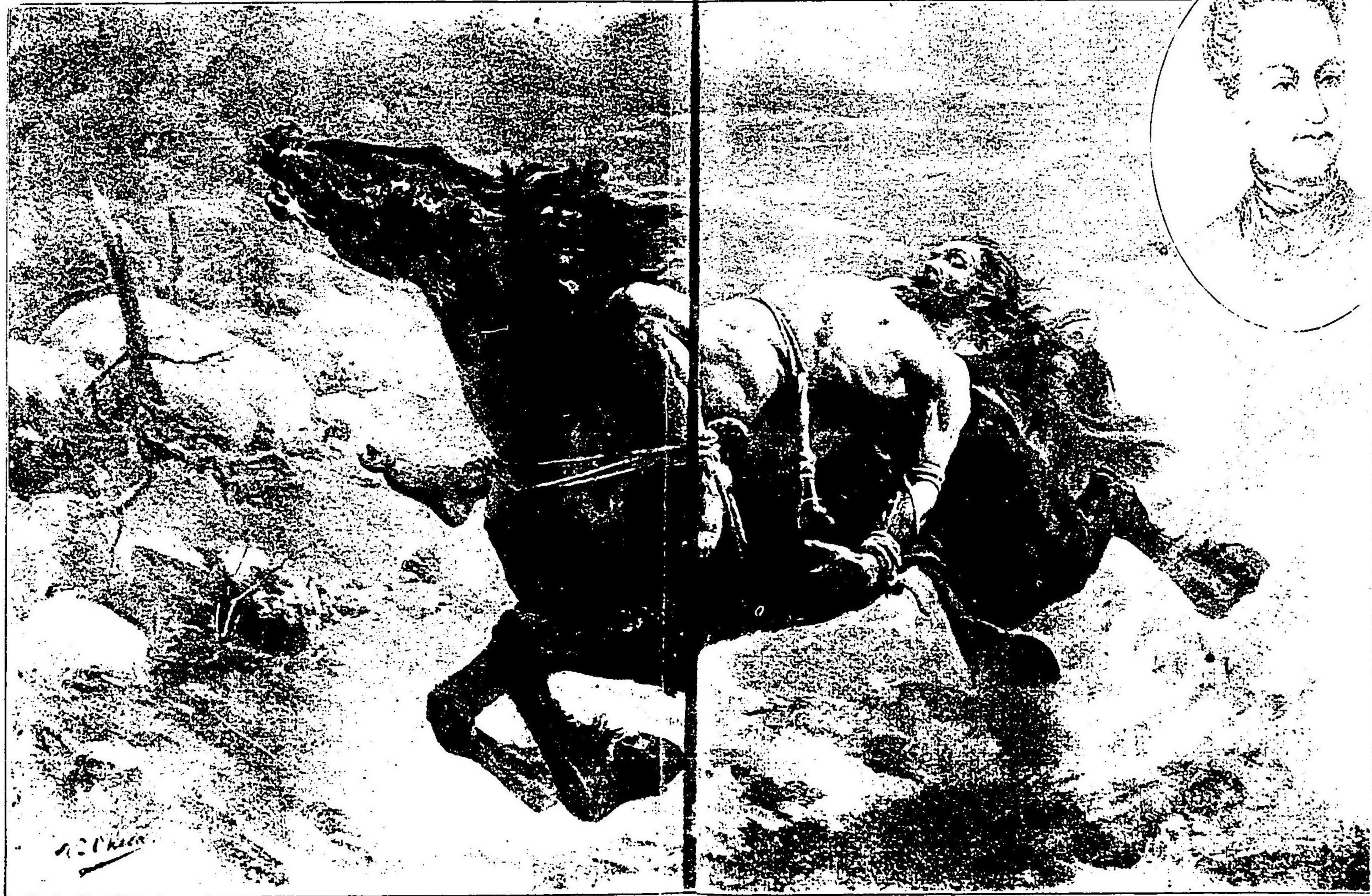


97
1126

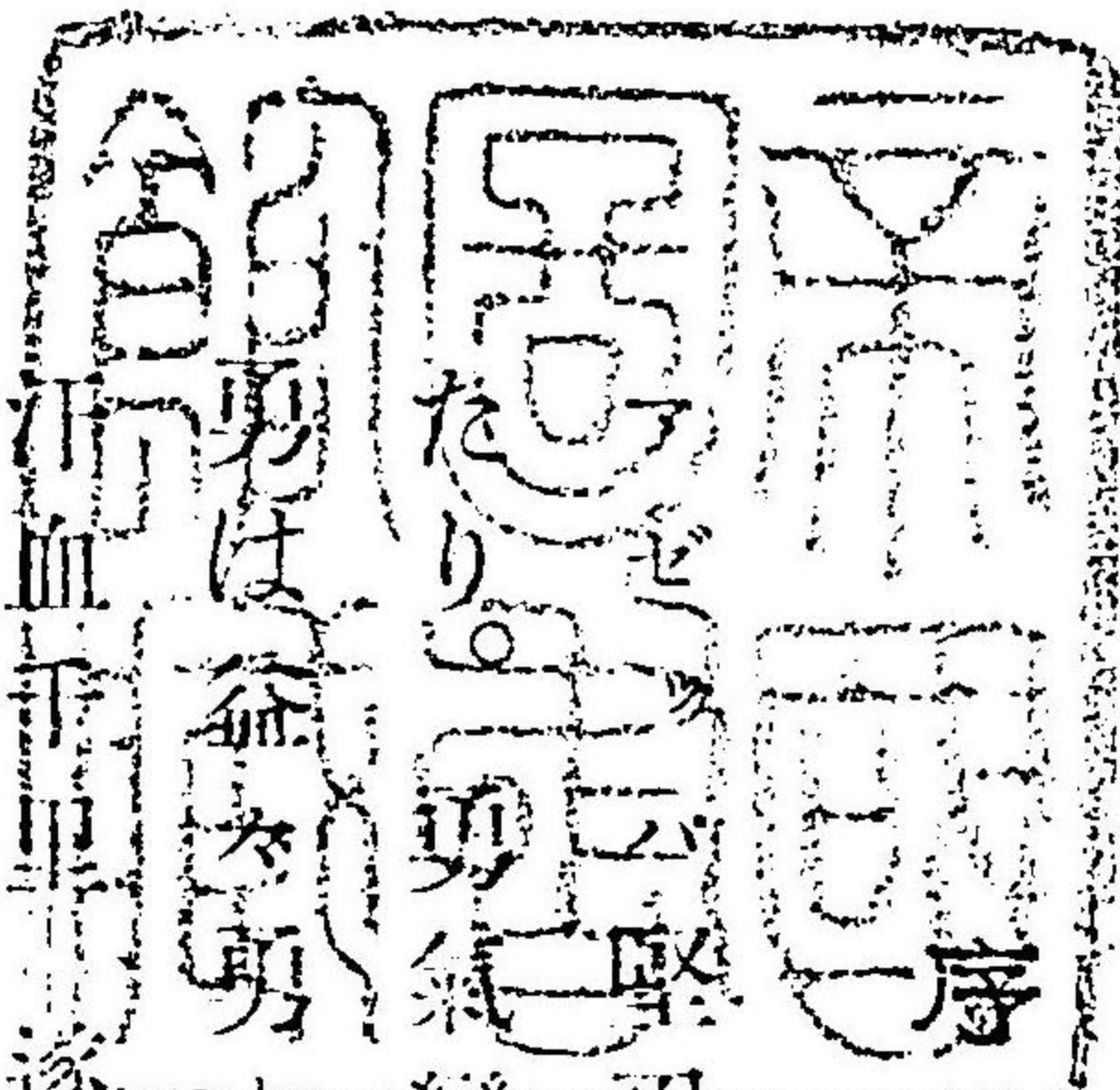
パ
イ
ロ
ン
原
作
木
村
鷹
太
郎
譯
汗
血
千
里
マ
ゼ
ッ
パ





カ
ロ
ル
ス
十
二
世

パ
ツ
ゼ
マ
(U. Geen)

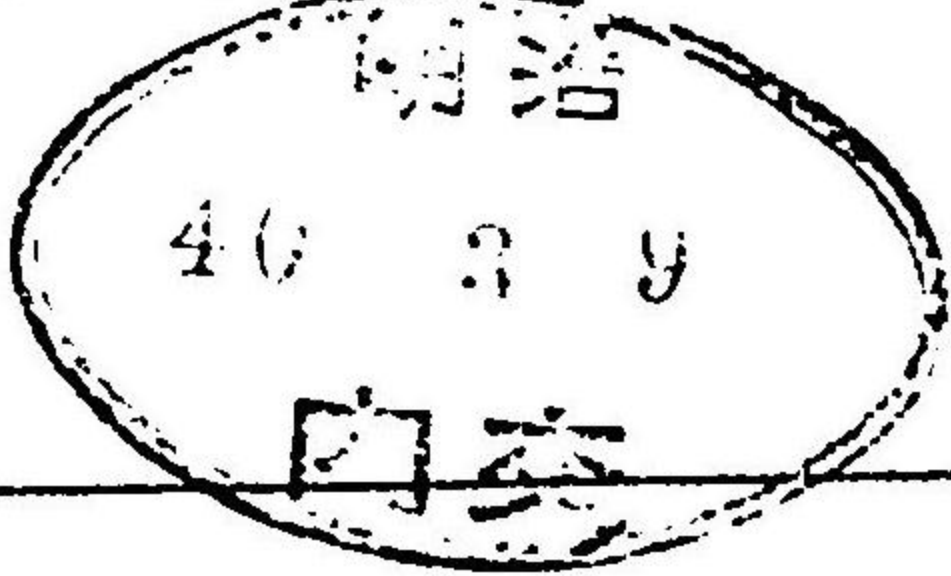


忍不拔、勇氣凛たり、戀愛艶
 たり。勇氣戀愛兩々映して美は益々美に
 なり。彼れ戀愛より曠野に
 遂に曠野を變じて王坐となす。

マゼッパの如きは眞の男子と謂ふべきなり。

明治四十年二月二十二日

東京淀橋柏木にて 譯者 識



汗血
千里

マゼツパ

目次

緒言—『マゼツパ』に就いて

- 一 運命瑞典王を離れ去り
- 二 振り出だしたる戦子の偶然のみ
- 三 ウクライナ族の酋長たり
- 四 『言葉はたとひ少きも』
- 五 『我の二十の春なりき』
- 六 『さてもテレサの姿』
- 七 『一度は或は否むとも』

- 七 「我は愛しぬ愛されぬ」
八 「伯爵殿は烈火の如き激怒なり」
九 「馬連れ來れ」馬連れ來さる」
十 「驅けれり驅れり」
十一 「風の翼に打乗りて」
十二 「若木も、老樹も、狼も」
十三 「地は陥落し天は回轉し」
十四 「波は打寄せ、星燦爛と」
十五 「猿には水滴り」
十六 「今や野蠻の精力は」

- 十七 「死したるものゝ其上に」
「我の最後の日の光」
十八 「待ち設けたる鳥は飛バ」
十九 「見てコサックの乙女は微笑み」
二十 「荒野を變じて王座となさしむ」

緒言

「マゼツパ」に就いて

木村鷹太郎

北歐の彗星王カロルス十二世と共に、史上に著名なるマゼツパは、バイロンの詩に由つて又た一層に著名の人物となり其堅忍不拔なることは、艶麗美と勇壯美とを以つて人心に映ずるに至れり。

イワン・マゼツパ (Ivan Mazepa) 一千六百四十四年に生

まるコサツクの會長なり。家貧なりと雖ポドリア (Podolia) 侯領なるマゼッピンツイ (Maszipintzi) の名族の後裔なり。ポーランド王ヨハンカシミールの宮廷に、小姓の教育を受けしが、一貴族の夫人に通じたるより、夫人の夫大ひに怒り、マゼッパを裸體となし、ウクライナ (Ukrain) より獲來れる野馬に縛し、烈しく之れを鞭打ちて放ちしかば、馬は己の産地を指して驀然として馳せ歸へり、マゼッパ其の地のコサツクの農夫に助けられ、此處に客となり居りしが、遂に其才幹に由つて一千六百八十七年推されて其地の會長となれり。彼れ

ピョートル大帝の信任を受け、ウクライナ侯の稱號を與へられしが、ウクライナをしてロシアより獨立せしめんと欲し、始めにポーランド王スタニスラウスと共に陰謀を企て、後スエーデン王カロルス十二世のロシアを征伐するに當り、マゼッパ之れと謀を通じたるが、ピョートル早くも其の企圖を察知し、マゼッパの國都バツィリンを屠りたり。マゼッパ遁れ來りてカロルス王の軍に會し、ポルタワの戦争に大敗してカロルス王と共にトルコに遁れ、後、一千七百〇九年ベンデル(トルコ)にて毒を仰て死せり。

○
バイロン此詩の例言に、ポルテールの著なる『カ
ルス十二世傳』中、マゼッパに關せる部分を引用せり、
左の如し（されども此に余の引用せる部分は、バイロ
ンの引用せるものより聊か多し。括弧内の文は引用せ
る部分なり）

『勝略者たるカロルス王は猶ほ、モスコビットの首府に
至る大道を取れり。而してスモレンスコよりモスクワ
に至る道程尙ほ一百「リーグ」、軍漸く糧糗に乏し。ピ
ペー伯は懇切に請て曰く、願くば將軍レ・エンハウブ

トの、軍須を齎らし、一萬五千の援兵を率ゐ来るを待
ちて、共に發せんと。王は他人の諫言を用ゆること甚
だ稀なりしかば、此萬全の良策に従はず、忽ちモスク
ワ街道を轉じて、南の方ウクライナに向つて行進を始
めしかば全軍の驚愕言ふべからず。抑もウクライナは
コサツク人の郷にして小韃靼、ポーランド、及びモス
コビットの中間にあり。……常に自由を企望したりと雖、
モスコビット、トルコ、ポーランドに圍繞さるゝを以
つて、此三國の一を、其保護國と頼み、随つて又た其
主君と仰がざるを得ざりしを以つて、始めはポーラン

ド人の保護に頼りしが、ポーランド人の之れを臣僕視すること甚しかりしより、其後ロシア人に歸服たしり。されどもロシア人も亦同一専制の權威を以つて之れを制馭したり。此國人は、元來總督の名を以つて一侯を撰立するの特權を有したりしと雖、ロシア人の爲めに此の特權を奪はれ、モスクワの朝廷之を指名するに至れり。

『當時此任に當れる人はポドリヤ侯領に生れたるマゼッパと呼べる波蘭の紳士なりき。此人ヨハン・カシミールに仕へて小姓の教育を受け、宮中の優麗なる生活の

臭味に薰染せり。年壯にして一紳士の夫人と穴隙を鑽りしかば、事發覺して、夫人の夫、梶を以つて之れを撻たしめ、彼れを裸體となし、野馬に縛して之れを放つ。此馬ウクライナ（ロシアの南部の地）より牽き來りし者なるより、自ら其故土に歸へり疲勞飢餓交々迫りて、半死半生のマゼッパを乗せ來れり。農民數人見て之れを助け、其後永く此地に住し、數々韃靼人との戰爭に功名を顯はし、其の智識超絶せるより、コサック人の尊敬を稱し、名聲漸く増加せしかば、魯帝（ピョートル大帝）遂に之れをウクライナ侯となさざる可からざ

ることゝなれり。

「マゼッパ一日、モスクワにて魯帝に陪食したることあり、帝囑するに、コサック人を訓練し、並に之れを順從仰賴せしむるの業を以つてす。マゼッパ乃ち答へて曰はく、ウクライナの位置と其の人民の性質とは、此くの如き計畫を妨げて爲すこと能はざらしむるなりと。魯帝酒氣漸く上りしかば、平時と雖喜怒を制する能はざる性なれば、マゼッパを謀反人なりと呼び、械縛せんと脅かせり。

「マゼッパ、ウクライナに歸りて反逆の企をなししが、

スエーデン軍の境邊に現はるゝに遇ひ、之れが實行に扶を得たり。其意謂へらく、己れ獨立の君となり、ウクライナと、ロシア帝國が滅ぼしたる他の小國とを合して、強大なる王國を建立せんと。此人や勇敢にして機略あり、且つ太だ剛毅なり。之れを以つて竊かにスエーデン王と相結び、魯帝の滅亡を促し、以つて自意を行はんと謀れり。」

然るにピョートル早くも其企圖を知り、マゼッパの國都バツリンを攻めて之を屠りたり。「マゼッパの親友は其劍を奪はれ、車輪に摧裂せらるゝ者三十人に至り、

其市府は灰土に歸し其貨物は掠奪せられ、スエーデン王の爲めに準備中なりし糶糧は取押へられしかば、こゝに六十人を率ゐて金銀を荷載せる馬匹を以つて其身を遁れ』辛ふして、國境に現はれたるカロルス王の軍に合し、一萬五千の兵を以つて、ロシア軍五萬に對し、猛烈慘激、悲壯なるポルタワ戦争を戦ひ、全然敗北し、兵士の大部分は、或は死し、或は生擒せられ、カロルス王は負傷し、僅少なる殘兵を以つて遁走す。

『カロルスは敵に追躡せられ、其馬を斃されたり。大佐ギエタと云へる者あり、身傷き出血の爲めに疲れた

りと雖、己の馬を王に献じたりしかば、諸人王を扶け起し、再び馬上に登せたり。……將軍レーエンハウプトは此敗軍を率ゐて一道よりし、王は騎兵の若干を具して他道より進みたり。行進中、王の車破壊せしかば諸人再び王を馬に乗らしめたり。其不幸の極、王は遂に終夜一森林中に彷徨したり。茲に於て、其勇氣も疲れはてたる精神を維持する能はず、其創傷は疲勞の爲めに愈々激して、堪ゆべからず、其馬亦疲れて斃れしかば、遂に一樹の根に横臥すること數時間、魯軍は四方に王を搜索して瞬々逼近せんとするの危険に迫れり』

（右に引用したるは故立花鏡三郎君の譯に係る『北光』中の文にして、二三余の變更したる個所あり）

（此詩は此際マゼッパが、カロルス王に物語りするの仕組みなり。）

是よりスエーデン王カロルスは、大速力を以つて遁走し、僅々數百の殘兵及びマゼッパ附隨し、ヲルスクラ（Volska）河とポリステネース河との會合するペレロフナ（Pelerochna）と稱する所より、非常の困難を以つてポリステネースの大河を渡り、其れより廣漠たる土地を經過し、殆ど饑餓に瀕し、辛うじてボグ（Bog）

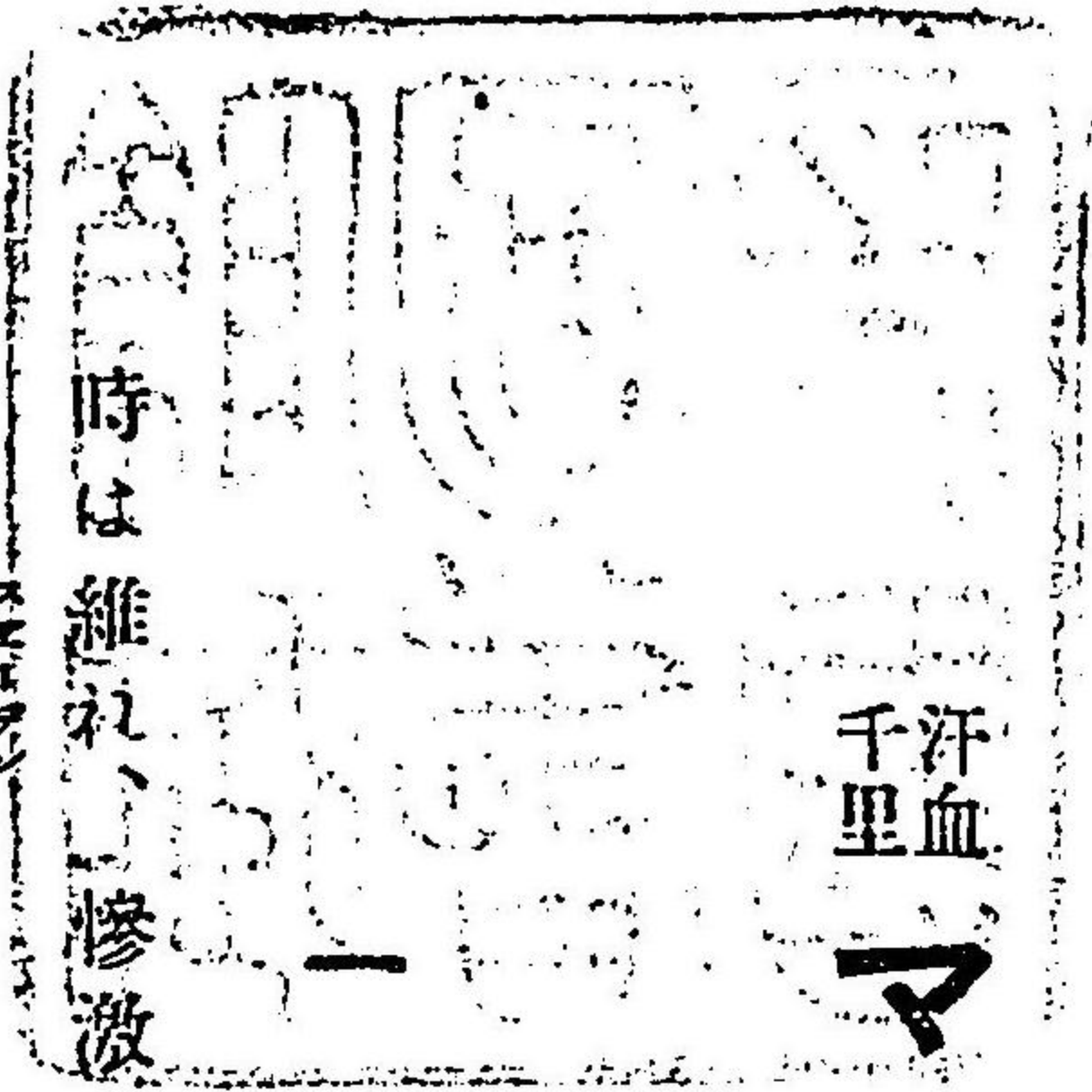
河を渡り、遂にトルコの「パシヤ」（副王）の厚意に由りドニエステル（Dniester）河上のベンデル（Bender）に駐まり、スエーデン王カロルス、マゼッパ及び殘兵數百はトルコ政府の客分となれり。然るにカロルス王トルコに客たる三年間は、其待遇上種々不當の要求を爲し、或はトルコをしてロシアと戦はしむる陰謀を企つるなどして、大にトルコ政府の迷惑を感ぜしめたるが、遂に私かに遁れてスエーデンに歸へりて、又々不運の數度の戦争を爲し、ノルエーを征伐する時彈丸に中つて没す。

元來ポルタワ戦争はマゼッパの献策に由つて戦はれたるものにして、マゼッパの名はロシア全國の教會より破門呪咀する所となれり。

後ロシアのピョートル大帝は、トルコ政府に要求するに、マゼッパの引渡を以つてせしと雖マゼッパは病を獲て（或は毒を仰ぎしとも云ふ）死し、（一千七百〇九年）爲めに其運命を遁れたり。マゼッパの墓はルーマニアの有名なる都府ガラツツ（Galatz）の聖マリア寺にありと謂ふ。

此詩は一千八百十八年、バイロン・ラズンナにて書き

しものにして、其草稿は、バイロンの情婦ギツチヨリ伯爵夫人テレサ手寫して英國に送りて印刷に附せしなり。『マゼッパ』中、美麗なるポーランドのテレサ、其年若き情郎及び年老たる夫「パラチン」伯を描くに當つてや、必ずや、イタリアなる情婦テレサ、其夫ギツチヨリ伯及び自己の身の上を織り込みしや疑ふべきに非ざるなり。（ギツチヨリ伯爵夫人テレサの事は拙著『バイロン文界の大魔王』八十三頁以下を見よ。）



汗血千里
マゼッパ

バイロン作
木村鷹太郎譯

時は維れ、^(三)慘激なるポルタワ戦争の後、

運命瑞典王^{スウェーデン}を離れ去り、

今や既に闘ふ能はず、又た血を濺ぐ能はざる、殺戮さ
れし軍隊を

累々として王の四周に残したり。

戦争の権力も光榮も
空しく戦争に奉仕ふなる、人等と同じく眞實なく、
今や勝に打誇れる、「ツァール」に全く歸しはてし、
他年一層今にもまさり、暗黒凄愴なる時と—
又た一層に、紀念すべき其年が、
今に優れる軍勢と、尙ほ傲慢の其名とを、
殺戮侮辱に附するまで、
モスクワの都の城壁は、再び心安けくなりけり。
實にこれ大なる破滅にして、又た甚しき蹉跌なり。
其一人に與へたる激動は—萬人に取つての電撃なり。

二

こは之れ、振り出だしたる骰子の偶然のみ。
負傷なしたるカロルスは、晝夜兼行、
己が血潮と臣下の血潮にまみれつゝ、
野を過ぎ河を打渡り、遁げざることを得ざるなり。
此敗走を助けんと、數千の兵士は斃れたり。
今や「眞理」は聊かだにも、「権力」を恐るゝ要なき所の、
弱りはたる此場にも、
一と言だにも大望を、非難する聲起るなし。

王の馬は斃れたり。ギエタは、我騎る馬を王に譲り—
其身はロシアの捕虜となりて死してけり。
此馬とても又假令、心盡くしていたわりしも、
激しき疲れに弱りはて、數里を行きて斃れたり。
取り圍みたる敵軍の、目標となれる篝火を
影ほの暗く遙かに見つゝ、
森の深みに、王は其身を、遂に休めて叶はずなりぬ。
嗚呼これ彼等國民が、必死の力を出だしつゝ、
求めし所の、名譽の月桂冠なるか、はた又た休みの場
所なるか。

彼等は疲れ弱りはて、苦しみなやむ其王を
荒き樹蔭に横へぬ。
王の手負はいとも烈しく、王の五體は甚だ硬く、
疾ましき今の此時は、げにも陰鬱暗憺として、
劍の熱持つその血潮は、
時に取つての救なる、暫時の眠も之れを許さず。
苦しみ此くの如しといへども、王は終始王者の如く
我が没落の威儀を保ち、
惱みの極のこの時にも
彼れの烈しき苦痛をば、彼れの意志の臣下となし、

嘗ては諸國の人民が、彼れの四周に服せし如く、
凡ての苦痛は肅然してと、皆盡く服従せり。

三

將士の一團一嗚呼如何に少きかな。
僅か一日の其中に、此くも人数減りにけり。
さは云へ今の此敗軍一皆誠心を盡しつ、
又た勇敢に戦ひぬ。
無念の悲しみ言葉なく、
王も軍馬も人々も、共に地上に坐しにける。
げにや危難は、獸も人も、皆な一様になしはて、
其必要の同じきより、凡てのものは友にぞある。

人々の内、ウクライナ族の酋長たり、沈着剛膽、而も若く非ざるマゼッパは、其身の粗らき其如く、年古り荒らき檜の樹の、蔭を己の枕と定め、

長途の軍に疲れしも、此コサツクの酋長は、先づ其馬を撫て下し、馬の爲めにと、木の葉の床を作りなし、膝をさすり、鬣を撫て腹帯を緩るめ、手綱を解き、此くして後に如何に善く、馬の秣に饜けるかを、

見るを始めて楽しみぬ。こは此時に至るまで、疲れし彼れの此愛馬は、夜露に打たれ休むをば、嫌ふ恐れもありしなり。然りと雖此馬は、其主の如く堅忍不拔、食事も床も何ぞ望まん、その氣は強きも亦柔和に、爲すべき事は何事も、必ず喜び之れを爲さん。毛荒く、捷く、足強く、全く凡て韃靼流に、馬は其身を振舞へり。

彼れの聲をば聽きわけて、其呼ぶ時は來るなり。
數千の人は入り交るも、
星も有らざる夜は來るも、
凡ての人の其中にも、彼れは其主を識り別けて、
夕より曉に至るまで
馬は子鹿の其如く、彼れの主人に附きまつへり。

四

マゼツバ此くて外套廣ろげ、
櫛の根幹に槍を立てかけ、
行程長き其間に、武器は何れも完きかを、
一々あらため試めしつゝ、
火薬は火皿に尙ほあるか、
燧の石は撃鐵に、しかと保たれ有るなるか、
刀の柄は如何ならん、又た其鞘は如何ならん。
帶革若しや摩り切れずや、撫てさすりつゝ改めぬ。

次いでけだかき此老将は、
糧囊及び鏝の中より、
いと僅かなる蓄へを、取り出だしつゝ並べつゝ、
宮に仕ふる人々等が、酒宴の席に在るよりも
尙ほ沈着の態度もて、
其食物の、全部或は其一部を、
王に捧げ、左右の者に薦めたり。
カロルス王は打ゑみつゝ、
暫が間、僅かの彼れの馳走に加はり、
強ひて機嫌を壯んにし、

負傷と不幸を超脱して、威ぜぬ様を力めつゝ、
扱て言ひけらく『吾等味方の一同は、
何れも心は勇敢に、手腕も強き其中に、
戦闘にも、進軍にも、又た襲撃にも、
言葉はたとひ少きも、其爲す所の優りて多きは、
嗚呼マゼッパ、汝に及ぶ者なけん。
アレキサンドロス以來今日まで、
汝がブケフアロスと汝程、
格好したる配偶は、地上に曾て生れざり。
洪水をも、原野をも、其を乗り廻はすの巧みなる、

スキチア人も其名譽を、凡て汝に譲るべし。」
マゼッパ答へて言ひけらく、

「さば、我が馬に乗る術の、學びの校を語らんか。」
カロルス王言ひけらく「如何に爲してか老會長
此くも汝は此術に、深く熟達致したる。」

マゼッパ曰く「此事語らばいと長し。
急流激するボリステネースの彼方にて、

我等の馬の休息して、秣飼ひ得る其れまでに、
吾等の一は、少くとも、敵の十に當りつゝ、
數々打撃を加へつゝ、

數里を尙ほも、吾等は行くを要するなり。
されど陛下よ、陛下の御身は休みを要す。

吾は陛下の、此軍隊の哨兵たらん。」

瑞典王言ひけらく「されども我れは望むなり、

汝の話語り聽かせよ、

或は我れは夫れに由り、

眠の寶得ることあらん—

其は今や、一時まどろむ其希望も、

我れの目よりは飛び去り居ればぞ。」

「さらば陛下よ、其如きの心もて、
吾れの記憶の、七十年の昔をたどらん。
思ひ出づれば、我れの二十の春なりき―
然り、カシミール―ヨハン・カシミールの、王たりし時
のこと―

我が青年時代の六年の間、
我れは王の小姓なりき。
此王眞に學を好み、
全く陛下と異にして、
一度も戦を起すことなく、

再び失ふ其爲めに、新の版圖を獲もなさず
たゞワルシヤの議會にて、議論するある其外は、
見苦しきまで、最も平和に支配せり。
さは言へ王を悩まする、心懸りのものは有り。
王は「ミューズ」と女性を愛せり。
されど是等は、時に王に従順ならず、
王をして、自ら不和を願はしむることもあり。
されども直に、怒り解くるや、
王は他なる女を愛し、或は新の書を読みつ、
次には盛大非常の祭を行ひ―

琦羅を飾れる王の宮廷、

みやび盡し、貴婦人將士を見ん爲めに、

全ワルシヤツの人々は、王の門邊かどべに集りつどひぬ。

王は波蘭ポランドのソロモンなりと、

彼れの詩人等皆歌へど、

こゝに一人、恩給得ざる詩人ありて、諷刺の詩を詠み

阿諛諂佞を爲さざるを、獨り自ら誇り居たり。

實にこれ、戯れ試合、狂言道化の宮廷にて、

此宮中にある者は、一人だにも詩文作らぬ者はなく

吾が如きだも一度は歌を作りつゝ、

吾れ其短歌に記名しぬ、『望あらざるチルジス』と。
時に一人の「バラチン」の宮内官あり。
伯爵にして名門の後裔なり。

又た其富や鹽礦銀山の豊けき如く、

其尊大の趣や、

或は之れ、天より降りし者かと思はる。

彼れ此く血統に富み、礦物に富み、

王座の下もとに在る者にて、匹敵する者殆どあるなし。

彼れつくづく、己が貨財を打眺め、

又其系圖を見つめつゝ、

途には思想の亂れを起し、
頭腦有らざる者かの如く、
祖先の立てし功蹟は、己れのものと思ふに至りぬ。
されども彼れの妻なる人は、
夫と意見を異にせり。
妻は芳紀、夫よりも三十若かく、
夫の支配の下に在るを、日々に物憂く思ひ來て、
途には種々の願ひ事、或は希望、或は恐れと思を起し、
徳義に向つて、いと僅かなる、別れの涙をこぼしつゝ、

穩かならざる夢一二三、ワルシヤの若人達に向くる目
使
歌の會及び舞踏の會など、
待ちに待たるゝ、さは云へ常の機會にて、
是等の樂しき折々は、
冷淡極まる貴婦人をも、いとも優しき人となし、
天に昇らん旅行券よと、人噂せる稱號もて、
夫の君たる、伯爵の名を飾るなり。
されど是等の稱號に、最も當れる人々を、
彼等の敢て誇らぬは、いとも不思議の事なりけり。

五

「其時吾は、容姿美しき青年なりき。」

此七十の吾が年にて、此くは言ふとも可ならんか―

吾が青春の其當時、

少年たれ成人たれ、

小姓たれ、或は騎士の階級たれ、

吾れに對して、華美を競ひ得る者は、其數いとも少なかり。

吾れは力も強く、年若かく、又た其氣質は快活に、

我が容貌は、君等が今見るが如きに非ず、
肌理もこまかにありしかど、今はむさく荒れはてぬ。
こは之れ齡と心使ひと、戰とが、
我れの額の表より、我れの心に、皺鋤き入れしに由ればなり。

此くて人若し、吾れの今と昔とを、比較するを得たりとも、

尙ほ我が同族にも一類にも、

吾れの言葉は信ぜられじ。

抑も此變化の始まりは、

我が年長けて、小姓たるの容貌を、失ふよりも長き前
なり。

たとひ年には寄りたりとも、

我が體力も勇氣も心も、其衰るへざるは皆な人々の知
れる所。

若し夫れ然らざらんには、今や星なき空を天蓋とし、

我れは木蔭に、

昔を語り居らざるべし。

さてもーテレサの姿ー

今も彼處の胡桃の木と、我れとの間に、

立ち現はるゝ思ひして、

其想ひ出は、此く鮮かに温かし。

されど此く吾が愛する女の姿、

如何なる言葉に言ひ表はさんー

其眼は實に亞細亞的、

我れに隣れる土耳其人種と、

我が波蘭の血統との、混合したるものにして、

今此空の、暗さが如き黒眼勝ちー

されどまた、夜半に月の出そめの如き、

なつかしき光は影さしつー

太く、暗く、光の流れに浮びつゝ、
其身自身の光彩に、溶け去るかとも思はれて、
凡て之れ愛、半は疲勞半は火、
恰も火刑に逢ふ聖者等が
死を喜べる様にして、
恍惚として、天を仰ぐに似たりけり。
其額は夏の湖水、
波もさゞめくなきの時、
日光さし込み、透きとほり、
天も己れの面影を、其處に眺むる如きなり。

頬と唇—我れ如何なれば、此くは語り進むぞも。
そは我れ其時女を愛し、今尙ほ愛する故にこそ。
此くて我れの性として、
善にも悪にも其愛や、實に烈しき極端なり。
されど吾等は今と雖、狂するばかりに尙ほ愛し、
此現在の年齢までも、
過去の空しき影に取りつかれ、
さもマゼッパが最後まで、王に従ふ如きなり。

六

「吾等は逢ひぬ―相見つめぬ―吾れ見て、と息つきにけり。」

彼女、言葉なけれど答は爲せり。

千萬無量の音調も、微證も是れに含まれて、
吾等其を聴き又た見るも、誰しも之を解くことなく―
知らず識らずの思想の火花は、
不思議と共に意味深き

一種異様の通信を、

疲れし胸より工夫し出だし、

燃ゆるが如き鎖を連ね、

意志あるに非ずして、若き人等の胸と心を結びつゝ、
如何になしては知らざれど、

電氣の線の爲す如く、焼きも盡くさんばかりなる、烈
火を傳へ送るなり。

我れ、彼女を見てと息つき―心の内には泣き居たり。

されども我れは女に知られ、

疑念を胸に置くことなく、語り得るに至るまでは、
尙ほも本意なき隔り保ちぬ。

二人の關係は、此くまで熟せしとは云へども、
我れ尙ほ胸に焦れ居て、漸く思ひを明かさんと、心決
しぬ。

さはいへ、震へる弱き我が聲は
殆ど一時其間、唇よりぞ消え去りぬ。

或日の事よ、或慰みの勝負あり、
げにこれ、たわけし遊びにて、

一と日を之れに費やしぬ。
吾れ今ま其名を忘れしが
或不思議なる機會にて、

吾等仲間に入れられしが、其機會の何なりしかは忘れ
たり。

或は勝つとも負くるとも、何れなりとも厭ふなし。

たゞ此く深く戀ひ慕ふ、人の近くに我が居りて、

又た見ることを得だにせば、

満足なりと思ひたり。

我れ番兵のその如く、彼女をのみ見守りぬ。

(聞き今宵の、吾等の見張りも此くこそあれ。)

見れば彼女、物思ひある面色にて

其爲す所に氣のなき如く、

負くるも勝つも悲しまず、又た喜ばぬ様なりき。

彼女勝つべしとしも見えざれど、

自ら己が心もて、其身を此處に縛りし如く、

尙ほ時長く遊びけり。

こゝに於てか我が頭腦に、忽然一の思想は浮び出ぬ、

さも之れ、電光の、閃きしにも比べべく、

彼女の身の振には、

我れを失望に、宣告せざる、或ものありと思はせたり。

此考へに従ひて、我は言葉を洩らししが、

凡てこれ、前後揃はぬものなりき。

其雄辯は、何等の値あるなきも、

彼女は其を聴きたり——之れにて足れり——

一と度び耳を借す者は、再び我に聴くものぞ。

彼女の心情は、確かに、氷にては非ざるなり。

一度は或は否むとも、其實拒むに非ざるなり。

「我は愛しぬ 愛されぬ。

聞けば陛下は

かゝる優さしき、情の事は知り玉はぬと。

若し夫れ眞に然りせば、吾が歡樂と苦痛との、話は凡

て省略せん。

陛下に在つては此くの如きは、笑ふべきこと、空しき

こと、見ゆるならんも、

凡ての人は盡く、支配せん爲め生れ來らず—

或は己が情欲を、

或は陛下の爲す如く、是等の情欲、及び多くの國民を、

我は一個の君主なり—然り寧ろ君主なりき。

能く數千の頭として、

彼等を率ゐ、激戰奮闘せしめ得れども、

たゞ我れ自身を制御するは、

之れと同じき事を得ず。

さるにても、我れは愛しぬ、愛されぬ。

げに—我れは幸運なりき。

され至極の幸福は、苦痛に終るものなりけり。

吾等忍びて相逢ひぬ。

夫人の室に、吾れの忍ひし「其時」は、

烈火の如き待つ戀の、養老資産「と今ぞ知る」

たゞ「かの時」の其外は、我が夜も晝も凡て何ぞや—

青年より老年まで、長き年月其間、

是れに似たる何事をも、思ひ出ださんとはなし。

吾れはウクライナの地を返還し、

再び小姓の身となりて、

一人のやさしき胸の君となり、己が劍の主となりて、

たゞ青春と健康との、天の授けの其外に、

寶石もなく富もなき、楽しき小姓とならまほし。

吾等忍びて相逢ひぬ—

人言ひけらく、忍び相逢ふ楽しみは、二倍の楽しみあ

るものよと、

そは我れ知らず—

天地の間に公明正大、たゞ彼女の生命を、我がもの

なりと言ひ得ん爲め、

我れの生命を、與へんことを願はしき。

我は屢々はかなみつ、且つ又た長く恨みたり—

たゞ／＼秘密に 忍び相逢ふのみなるを。

「凡て戀人等に對しては、多くの人目あるものにて、此くの如き多くの人目は、實に吾等の上にもありき。かゝる折には、惡魔も禮儀を守るべし——あゝ惡魔——我れは彼れを、害することを好まざり。たゞ其敬虔なる義忿をば、洩らさんとの其爲めに、餘りに長く、心休めぬ其人は、稍強情の、聖者にてもや之れ有らん。然りと雖、美しき或夜のこと、待ち伏せしたる間者等

は

不意に現はれ、驚く吾等二人を捕へぬ。

伯爵殿は、烈火の如き激怒なり。

我は其時何の武裝もあらざりき、

たとひ若しくは、頭の先きより足の先きまで、剛鐵をもて甲ひたりとも、

彼等多數に對しては、今はた何をか爲し得べき。

場所はこれ城の近く、市街を離れて、何の救助も得難き地、

時は殆ど曉近き頃なりき。

我は他日の太陽を、又た見得んとは考へず、
我れの生命の瞬間は、僅かになれりと思ひたり。
されば我は、聖母マリアと、
一人二人の聖者とに祈禱をさしげ、
身を運命に任かし、時、
彼等は我を、城門内に運び入りぬ、
テレサの運命、如何になりしか吾れ知らず、
其時以來全く吾等別け離されぬ。
傲慢なるバラチン伯の忿怒の状は、
推測しても之れを知れ。

其は素よりの道理なり。
されども彼れの最も怒るは、
かゝる意外の事件が、
將來彼れの、家系を襲がすを恐れてなり。
又た彼れや、其血統の中にも、最も高きに關はず、
其貴き紋章に、かゝる汚辱を被りしには、
驚愕少なからざりき。
こは彼れ、人間中の第一なりと、自ら思ひ—
他人の目にも然るべく—且つ殊に、我れの眼には然る
べしと、自ら思ひし故にこそ。

あゝ我れ僅かに事の始め、小姓の身にて死せざる可からず――

されど恐らく、王は自ら仲裁しけん。

我れ小姓の青春を以つてして――

伯爵殿の、忿怒は之れを感ずるも、其形容は之れを盡き能はぬなり。

九

「馬○連○れ○來○れ」馬○連○れ○來○た○さ○る○。

此○馬○實○に○駿○馬○に○し○て、

ウ○ク○ラ○イ○ナ○産○の○韃○鞬○種○。

其思想の迅速なるは、

四足にありとまで見られたり。

此馬甚だ荒く、其荒きこと、野生の鹿の荒きが如く、馴致されたることもなく、拍車も轡も未だ之れを受け

しことなく、

僅かに一日捕へられて、此處に來りしものたるなり。
鼻息強く鬣振り立て、
烈しく荒るゝも其甲斐なく、
怒りと恐れを吹きつゝ――
此くの如きの荒野育は――我れにまで持ち來されぬ。
彼れの卑しき奴僕等は、
革の紐の多くもて、我を馬背に縛り付け、
急撃一鞭、馬をば解きて放ちしかば、
吾等忽ち突進奔逸、遠く彼方に、轟然に駆け去りつゝ、
其急激猛烈なる、如何なる激流も比すべきに非ざりき。

十

「驅けれり――驅けれり、我が息盡きぬ、
馬は何處に馳せ行くや、我れは知らず。
時はいま、漸く曉なせる頃、
馬は尙ほ泡を吹きつゝ、たゞ一さんに驅けれり――驅け
れり。
我れが敵より驅け出し時、
聽きし所の最後の聲は、
啣り笑ふ野蠻粗暴の叫びにして、

下賤の奴僕の群衆より、
瞬時の後、風に送られ轟み來れり。
我れは怒りて、突然頭ねぢ上げて、
手綱代りに我れの頸を、
鬘に、縛り付けたる綱を緊付け、
殆ど半、我身を持ち上げ
咀の言葉を叫び返へせり。
然りと雖馬の足がぎの速なると、又た其雷なす響とに、
彼等恐らく其を聽かず、又た氣を留むるなかりしなら
ん。

彼等の無禮に、報ひんと思ひたる我れ、
如何てか之れを怒らざらん。
此後我れ、見事に之れに復讐し、
城門も、釣り橋も、又た重き釣り格子も、
石も、障害物も、堀も、橋も、又た柵も、
一も之れを残さずことなく、
其田畑には、草の一と葉もあらしめず、
たゞかの館の、煖爐の石の在りしあたり、
崩れ落ちたる壁の上に、草の生ゆるのみとはなしぬ。
人若し、數々其所を過ぎ行くとも、

管ては此處に城塞ありしを、夢にも知ることなかるべし。

我れ、其塔や、樓は燃え、
城砦の壁は裂け砕け、音を立て、崩れ落ち、
焼けて黒ずむ其屋根は、
厚さはたとひ厚しとも、復讐除けとなり能はず、
鉛の熱湯、雨の如く注がるゝを見き。
塵きに彼等が雷なせる馬に我れを乗せ、
死地に激奔爲さしめて、吾れに苦痛を與へし日には、
他日我れが再び來り、

五千騎の二倍もて、

伯爵殿の不體なる、乘馬に謝禮すべしとは、
夢にも之れを思はざりけん。

其時彼等我れに惡戯し。

荒れ馬をもて嚮導となし、

そが汗血の脇腹に我を縛れり。

されども「時」は、凡ての物を平均す—

遂には我れは、思ふがまゝに、彼等を戯れ弄びぬ—

若し吾等、人の罪をば赦るすことなく、

たゞよく時機を窺ふ時は、

か○の○悪○行○を○蓄○へ○て、積○み○重○ね○た○る○者○に○對○し○て、
忍○耐○な○せ○る○探○索○と、長○き○時○日○の○注○意○と○を、
通○れ○得○し○む○る○人○力○な○る○も○の、未○だ○嘗○て○之○れ○あ○る○な○し。

十一

「驅○れ○り、驅○れ○り、我○と○馬○と○は、
風○の○翼○に○打○乗○り○て、
人○の○住○居○は、凡○て○こ○れ○を○後○に○見○ぬ。
馬○蹄○の○音○は○鳴○り○響○き、
夜○は○北○光○に○閃○く○時、
天○を○横○ぎ○る○流○星○の、如○く○に○吾○等○飛○び○行○き○ぬ—
我○等○の○路○に○當○つ○て○は、町○も○村○も○一○つ○だ○に○なく、
曠○遼○た○る○大○野○原○が

黒き色なる、森に限られあるのみにて、
遠き彼方の小高き山に
土耳其人種を防がん爲め、去る年築きし城砦の、
やぐらの壁をかすかに見るのみ——
人跡更に有ることなし。

こゝは前きに、土耳其軍勢侵入し、
スパーヒ騎兵の、馬蹄の蹂躪し盡くして、
草の緑は、血潮の泥に塗れし所。
天は曇りて、灰色なして薄暗く、
低く吹き來る軟風は、物哀れげに下匍匐つ、

我れたゞ歎息、之れに答へ得たるのみ。
されど我等は、遠く遠く、急速に馳せ去りつ、
と息も祈禱も、何れもこれを爲し能はず、
冷たき汗は、滴々と雨なして、
毛荒き馬の、鬣の上に落つ。
されども馬は、尙ほも怒りと恐れとに、鼻息荒らく
飛ぶが如くに大速力もて長驅せり。
時には我れ、まことに思ひけらく、
馬は今や、其速力に弱りしならんと。
されど然らず。縛られたるか細き我身は

怒れる馬の力に取つては、何ものにもあることなく
却つて拍車の用を爲し、
脹れて痛める我れの五體の、其苦しさを弛めんと。
身を動かす度毎に、
馬の怒と駭とを、愈々増すにといまれり。
我れ試みに聲立つれば、あゝ微かにして低けれども、
馬は恰も鞭打たれたるものかの如く、うねりつ曲りつ
一言一語に駭きて、
突然ひびく喇叭の音を、聴きしが如く跳び上り、
忽ちにして、我を縛れる草紐は、血潮に濡ひ、

凡て手足ににじみ流れ、
舌の渴は。
火焰よりも尙ほ一層、猛烈きものとなり來りぬ。

我れ森林に近づきぬ—
 際てしもあらぬ廣さにて、
 彼處に此處にそば立てる、喬木老樹は
 かのシベリアの荒野より、猛り狂うて吹き下だす、
 其すさまじき勢に、森を赤裸に剝ぎ去らん
 最も荒き疾風にも、敢て屈することはなし。
 さはいへ是等は數少く、又た互に隔りて、
 其の間には若かき緑の灌木の、茂げみはいと深くし

て、
 其年々の、青葉豊かに榮ゆなり。
 然りと雖、秋の夕の木枯吹かば
 森の木の葉は枯れ落ちて、
 色は全くさめはて、生氣あらざる赤となり、
 さも戦場の屍の上に、
 硬ばり固まる血潮の如く、地一面に散り敷きて、
 冬の夜長の白霜の
 其等死人の、墓なき頭におくときは、
 冷えて凍りて堅まりて、

さす。が。鳥。の。隊。も。凍。り。し。其。等。死。人。の。頬。を。ば。穿。ち。得。ざ。る。の。趣。あり。

げにこれ、樹の下生の荒野にて、

彼處に此處に胡桃の木、

不撓不屈の、樅の木松の木そば立てど、

是等は互に隔りて——こはまことに仕合せなりき、

若し夫れ然らざらんには、我運命や如何なりけん——

多くの枝は道を開きて、我の手足を傷つけず、

已に寒氣に、いためられたる我傷も、

これに耐ゆるの、力あるをば知り得しも、

我を縛れる草紐は、身をゆるむるを許るさゞり。

我等宛も風の如く、音騒がしく枝葉の中をくゞり行き。

若木も、老樹も、狼も——是等を後に見残せり。

夜ざれば、是等多数の狼は、我が行く路に吼え唸り、

群を爲して、吾等の後に迫り來り、

其迅速なる長驅には、

深き恨の獵犬をも、獵師の銃をも疲らし得べく、

吾等何處に驅けるとも、彼等必ず後附け來り、

朝の太陽登るといへども、彼等決して去り行かず、

夜明の頃には、森林中をうねり廻り、

後に迫る、僅かに一丈半の隔

夜はよもすがら彼等の足音

或は忍び、或は騒ぐ足音の、繰り返へされて聴ゆるな

り。
あゝ、我れ死なでかなはぬことなりせば、

寧ろ多数に取り圍まれ、

死地に陥り、多くの敵を斃しつゝ

或は槍に、又た劍に、死なんことをぞ望みたる。

始め我れ、馬の駆け出でたりし時、

我目的は、已にこれを、達し得たりと思ひしも、

今や馬の速力も、力もこれを疑ひぬ。

然りと雖、此疑は用あらず、其速力と荒き育は

彼を勵まし力付け、宛も牡鹿の如く爲し

森林中を馳する勢、

眼くらます吹雪の爲めに

農夫を己が門邊に倒はし、

再び闘ふみてゑて、我家に入るを得しめざる、

目も開かれず降る雪も、其迅速なるには遙かに及ばず

疲れず。馴れず、暴らさよりも尙ほ悪しく、

其狂暴の有様や、思ふ所を妨げられし小兒の如く、

尙ほ一層に猛烈なるや——氣隨氣儘に振まへる、
婦女子の怒れる如きなり。

十三

『森も之れを通り抜け、日も已に正午を過ぎ、
時、六月の空にしあれど、風は甚だ悪寒し。
こはこれ或は我が脈の、冷たく流るゝ故にやあらんか—
いと長びきし耐忍は、猛けき氣象も鈍らせて、
其時我は、今見る如きに非りき。
さはさりながら、寒き流れの其如く、いと急速はしく、
我が諸々の感覺は、其原因を考へ得たらん其の前に
全く疲れ弱りはて、

狂暴と、恐懼と、又た激怒と、

我れの前途に當れる所の

寒氣と、饑餓と、悲哀と、耻辱と、苦痛の苛責と共に、

此くは自然其儘の、赤裸の身にて縛られぬ。

我れやかの、昂揚なせる其血潮は

若し其静かなるを激せしめて

強くこれを踏み付くれば、

其復讐や、毒蛇のその如きなり、一族より出でし者—

今若し疲れ果てたる此我身が

苦難の下に一時沈むも、何の異しむことかある。

地は陥落し、天は回轉し、
我は地中に、沈没するかと感じたり。

されどこれはこれ誤なりき—我は固く、縛られてある者

なれば。

胸は痛み、脳は病み、

暫時動悸せしかども、やがて直にそもやみて、

天は宛も強大なる、車輪の旋轉する如く、

木々は宛も醉漢の、よろめくもの、如くに見え、

微かの火花は、我目の上に見えしかど、やがて是れも

見えずなりぬ。

たとひ如何なる人なりとも
我此時に死なんよりも、苦しき死はよもあらじ。
其ものすぎ馬の背に、其苦しみの堪え難たみ、
黒きものは、我目の前に行きかひつ、
自ら目さまし起さんと、必死に力めし如きを感じぬ。
然りと雖、我感覺を勵まして、下より上に、登らしむ
るを爲し得ざり。

我身はげにも、海に浮べる板子に乗れる如くにて、
大浪激しく打寄せて、
其をもち上げて覆へし、

我身忽ち、大海原に、投げ出だされん思ひかな。
今此く、動搖なせる我生命は、

腦に發熱しそむる時、

假幻の光の

深更閉し、我の眼に、閃くさまに比ふべし。

されど僅かの苦痛にて、熱も直に去り行けど、

これにまさりて最も悪しきは、思想の亂を起すにあ
り。

我は實に自白せん——再び是れを感ぜんよりも、
寧ろ死ぬるを優れりと。

されど想ふに我れ死して、塵に歸するに至るまでは
尙ほ一層に、感せざるを得ざるべしと。
然りと雖何かあらん——我は以前も又今も
已に十分我額を、死の面前に曝らしたり。

十四

「我は氣付きぬ。我は何處に在りしにや。
冷えて、しびれて、目まひして、
脈、ひと脈共度に、ためらう生命を取り留め、
動悸に動悸——遂に積りて激痛し、
まさに痙攣せんばかり。
我が血は再び、廻り始めしとはいへど、濃き冷やしか
のものなりき。
耳には不思議の音鳴り聴こえ、

我れの心臓、爲めに再び震ひ始めぬ。
目は見ゆるに至りしも、尙ほ甚だ微かにして、
厚く硝子を、重ねし如き思あり、
其時我は感ずらく、近くに波は打押せて。
星燦爛と、きらめく空も亦ありと—
こはこれ夢にあらずして、
此荒馬は、其荒らきよりも尙ほ荒らき、流を泳ぎ渡れ
るなり。
かゝやく大河の、進れる潮流は、
遠く廣く、滔々と渦まき流れ、

我等は今やまだ知らぬ、彼方の聲なき岸邊に向つて、
進みあせれる中途にあり。
波の音は我の空しき夢幻を破りて、
氣を失へる我の五體は、
一時の力に洗禮されたり。
我此馬の廣き胸は
逆か巻く高き波をも恐れず、
其を衝き破りて我等は進み、
遂に辛くも、平かなる岸邊に着きぬ。
然りと雖これやこれ、我に益なき避難の場所—

そは凡て、過ぎ來し方は暗くして、又た其上にもものす
ごく。
行手は同じく又た凡て、夜と恐とのみなればぞ。
或は夜の、又た晝の、其時間のいくそばく、
終知れざる、かゝる苦痛にあるべきかは、
我れはこれを告ぐるを得ず、
たゞ我が知れるは、我がなす呼吸は、これをしも、
人間の呼吸と云ふべきやを。

十五

「毛皮には光澤を帯び、鬚には水滴り、
足はよろめき、脇腹には湯氣立のぼり、
此荒馬の、強き氣象の筋力は、
追ひも反へさんばかりなる、嶮はしき堤を、尙ほ攀ち
登れり。

我等頂上に達して見れば、
はてしも有らぬ平原は、夜の蔭なる暗さと共に延まり
つ、

尙ほく進む行く程に
夢に見るなる斷崖の
我眼界を打超えて、遠く廣さが如くにて、
月、我が右方に登りなば
かしこにこゝに白き斑
又た飛び散れる、薄暗き緑の點は、
數集まりて、月の光に交はれり。
されども闇き此荒野に
小屋の戸口の徴として
人家あるをば示めさんは、一物だにも有ることなく、

我を迎ふる星の如くに、
遙にきらめく、小き燈の火も見えず、
我の不幸を慰さまん
鬼火だにも出づるなし—
其欺惑も其時は、我の心をよろこばせ、
其を欺惑と知れりとも、我れ尙ほ之れを歡迎せん。
多くの不幸の事の内
人の住家を、我れに思ひ出しむればなり。

十六

『吾等は尙ほも前進せり—されども緩く徐に。今や野蠻。精力は、全く使ひ盡くされて、頸垂れ弱る我馬は、其氣は微に力なく、喘息ぎよるめき歩みけり。いかに弱き幼兒たりとも。今此時の此馬は、これを牽き行き得べきなり。されども凡て我に用なく—
此くは新に馴れしとも、何等の益もあることなし—

我の手足は、縛しめられてあるなれば。
又た假令、其いましめは解かるとも
我の力は、今はた何をか爲し得べき。
さはさりながら我は尙ほ、いと微かなる力もて、
強く縛れる草紐を、引きちぎらんと試みぬ。
然りと雖其甲斐なく、
我の手足は、尙ほ々々痛みを増すのみに、
益なきもがきは、直に之れを断念せり。
されどこはこれ、たゞ其痛みを、永引かしむるのみに
こそ。

眩暈ふばかりの其驅は、今や殆ど終りし如きも、
終極點には達しも爲さず。

時に柵引く條なす色は、今や將に日の登らんとするを

示めせり――

あゝ其登るや遅きかな。

我は思ひぬ、灰色なせる此朝霧は、

晝の光を、點ずることはあらざるべしと。

しのゝめ明くるかの「火焰」が、真紅の色に高まりて、

凡の星の位を廢黜け

彼等の乗れる車より、其光輝を召し出し、

奥いと深き玉座より、たゞひとり、全く己がものな
る榮光もて

此地球を充たすの前、

あゝ朝霧、其の捲き去るの遅かりしかな。

「朝日は登りぬ。

たてこめたりし霧はしも、寂き四周の世界より、
後ろも前も捲き去れり。

何ものか此の、平野を、森を、又河を、

其を横ぎると、踏みさぐみたる者やある。

人も獸も、蹄の痕も足跡も

荒れ茂りたる此土地に、たゞの一つも有ることなく、

旅人行きししるしなく、人働さしあともなく、

四邊の空氣凡て寂寥。

小き虫の一つだに、小き笛の音鳴らしもなさず、

朝囀る鳥の聲、

叢よりも森よりも、聽ゆるものは有らざりき。

不幸の事は數あまた、胸は宛も、破れんばかり動悸せ
ど、

疲れはてたる我馬は、よろめきながら尙ほ歩み、

我等は尙ほも獨りさみしく、又たは然るが如く思ひに
き。

此くて、よろめきながら行き居りしに、

遂に彼方の、椈の木小暗き樹立より
馬の嘶、聽こゑし如く思ひたり。

其等の樹の枝動くは如何に、そは風なるか。
否々、森の中より、馬の一隊、踏みしたぎつゝ、躍り出

で。

此方に來るを我れ見たり。

彼等は大に、隊を爲しつゝ進むなり。

我れ叫ばんとあせりしも、我唇は聲を出ださず。

其等の馬は、滿々たる豪氣を以つて、突進奔放なした

りぬ。

然りと雖、彼等を導く、手綱なるもの何處にかある。
無數の群馬、あゝ何者の乗れるあるなく、

尾は振り動き、鬚ゆらめき、

廣き鼻は、苦痛を以つ開きしことなく、

手綱、轡に、口、血を流さず、

未だ嘗て、足、蹄鐵を受けしことなく、

其脇腹は、拍車に、鞭に、創つけられしことあらず。

無數の馬は、自然のまゝに自由にて、

海上續づく波に似て、

我等の弱き近づきを、迎ふるもの、其如く、

雷なすひゞき踏みとゞろかし、群れ圍りて近寄りぬ。
此光景に、我馬再び興奮し、
よろめきながら、僅かに馳せしも瞬く間、
弱きかすかの嘶を
答となして斃れたり。
息せき喘ぎ、目はうるみ、
汗の氣のぼる其軀軀は、終に動かす横たはり、
我乗る駿馬の、始たり又は終たる大驅は、此くて完く
遂げられぬ。
群がる馬は近づき來り—斃れし馬を打眺め、

又た其が背に、革の紐の多くもて、
縛られてある我を見て、不思議の思ある如し。
彼等は、立ち止まりつ、又た去りつ、我等をめぐりめ
ぐりしか、
彼等の種族の宗領なるらん
する墨黒く、粗らき毛に
白き一點一毛だになき
いと逞しき、一つの馬の先立に
彼等は不意に跳ね躍り、かなたに驅けりとび行きつ、
鼻息荒く、泡をかみつ嘶きつ、右に左に寄せつ返しつ、

其を人間の眼より見ば、皆天性に由れる如く、
森の茂みに馳せ歸へり、
我は依然、死して硬ばる獸に縛られ、
一人あとに残されて、只失望の外ぞなき。
此くて我身の下には、生命絶えにし驂軀は斃れ、
慣れぬ重みは救はれしも、
我は其處より、彼れも我をも解き去ゆ能はず、
死したるもの、其上に、今やまさに死なんとして、
我等はこゝに横はり、
我れの家なき助なき、頭を次に明くる日の、

又た見るべしとは、聊か思ひなさゞりき。
「朝より夕に至るまで、我はこゝに縛られて、
重き苦しき、時間を過ごし、
我の最後の日の光、我を照らして西に沈むを
僅に見得る、生命保てるのみにして、
我れの心は、絶望の確かさもて、
前見し得る我等の年齢が、預め示めす所の
最も悪しき、多くの恐れ最後のものに
遂に我等は、委せ了りし思ひせり—

こは實に免れ難き——
其疾く來るや、却つて不親切に非ざる所の、ふくり物
にてあるものを、

こはこれ一種の係蹄にして
智慮もて免れ得るかの如く、

尙ほ其を厭ひ其を恐れぬ。

時には是れを願ふと共に、切にこれを求むるあり、

時には劍のきつ尖もて、自ら求むることもあり。

さはさりながら、假令いかに堪え難き、苦痛の生命な

りとはいへ、

尙ほこれ暗き、ものすごき終にて、
如何なる形を以つて來るも、歡び迎ふるものに非ず。

言ふも不思議、かの快樂の子

美と祝杯と、酒と貨に

興樂盡くし、其者等は

かの、貧困を、相繼したる者よりも

往々靜かに、死するものなり。

こはこれ凡て美なるもの、新奇のものを

順次に浪費し盡くし、者は、

望まん物も更になく、残せる物も更になく

たゞ未來のみ（これとても
人と、卑しき、或は善きと観ることなく、
彼等の氣力は、授かり得べきことゝ觀て）
悲しきことも、或はあることなかるべし。
然りと雖憫れむべきかな、彼れ尙ほ、其禍の終らんこ
とを希望して、

其友として見るべき「死」は、
悩み亂るゝ彼れの目には、
己が得べき報酬の、新樂園の樹の實をば
奪はんとして、來るが如く觀ゆるなり。

然りと雖明日は、凡を彼に與ふべく、
彼れの苦痛を返済し、彼れの不幸を償はん。
明日は、歎くことなく呪ふことなく、
光りかゞやき且つ長く、手招き寄する年月の
其初めの日なるべく、
苦しかりにし、長き時間の報酬として、
明日こそは、支配し、かゞやき、撃ち、救はんの力を
彼に與ふべく——
其が墓の上に、東雲あくべきことなるか

十八

『日は將に没せんとせど、
我れ尙ほ寒き、硬固なる馬に縛られ、
我等の土は、こゝに交ゆることと考へ、
くらさおぼろの我の目は、死をば今や需むるなり。
解き放されて、自由を得べき望は起らず、
目を上げて、最後の眺めを、空に向けしに、
日と我との間には、
待ち設けたる鳥は飛び、

我々の死するを待ち兼ねて、
其食事を始めんとせり。
彼れ飛び去りつ又た棲まりつ、又た再び飛び去りつ、
其時毎に前よりも、愈々我に近づきぬ。
我れ、曉の光の中、其羽ばたく翼を見、
一度のごときは、打ち得るまでに近づきしも、
あゝ我れ力あらざりき。
されど僅かに我手を動かし、
いとも弱く砂を掻き、
咽喉勵まし、微かにして、僅かに聲と稱へ得る、

苦しき音を立てしかば、
漸く是等を以つてして、鳥は威どしさりしかど、
其れより後は何をも知らず—
我の最後に見し夢は、
いと美はしき星は、鈍りし我の目にかどやき、
其光はさまよひて、かなたこなたに、ゆきしつ、
寒き、鈍き、漂へる
さりては來る感覺あり、
次には再び死に沈み、
次には再びかすかに呼吸し、

暫く震ひ、暫くやみ、
氷の如き病ましさは、我れの胸に蔽ひ凝まり、
火花の星は、我腦中を横切りつ—
息が通り、胸は動悸し、苦痛にもがき、
といきつき、其他は何も知らざりき。

十九

「我は目さめぬ——我は何處に在りにけん。
我の上に見下すは、こは人間の顔なるか。
我の上を蔽へるは、こは屋根にてあるなるか。
我の此身の休めるは、こは寢臺の上なるか。
我の臥せるは、こは室にてあるなるか。
かしこに柔しき眺めもて、我を見まもれる
すゞしき其目は、こは人間にてあるなるか。
我は再び目を鎖ぢたり、

そは前きの、我が見し夢か幻かは
未だ終らぬ思ひして、尙ほ疑のあればなり。
か弱き乙女、髪長く、丈高きが、
小屋の壁にもたれつゝ、我を見まもれり。
乙女の眼のかゞやきを、我れはみとめつ。
これと共に、我は始めて氣付きたり。
自然のまゝに飾なき、黒目勝なる目なきしもて。
乙女は時々、つくぐと、憐れむさまに我を見ぬ。
我も見つめぬ。
こは幻に非ずして、

我は生きて
然の餌じきとなることを、免れたるを知るまでは、
我も同じく見つめたり。
私の重き目、遂に漸く開きしを、
見て、コザツクの乙女は微笑み、
我れ語らんと力めしも、未だ言葉は出てざりき。
乙女は我に近寄りて、
其唇と指とをもて、符牒となして我を制し、
我の力の回復して、
思ふがまゝに、語り得ん時までは、

強て無言を、破る勿れと誨へつゝ、
其手を我手の上に置き、
枕を直ほし平にし、
爪先もて忍び足して、
静かに戸をあけ、いと小聲にてさゝやきぬ。
此く美しき聲音をば、未だ嘗て聴きしことなく
其いと軽き歩みには、音楽附き添ふ思ひせり。
然りと雖乙女の呼びし、其等の者は目さめずて、
乙女は彼方に出て行きぬ。
其出て行く時にしも、再び我をかへり見て、

又た他の手眞似の符^{しるし}謀^まもて
我れ何物も、恐るゝことの用あらず、
凡の人は近くにあり、一度命じ、呼びもせば、
彼女、直にこゝに歸り來る、事の由をば知らせたり。
此くて乙女は行きければ、
我はあまりに一人^{ひと}にて、物さみしさを感じたり。

二十

乙女は來れり、母と父とを伴ひて—
その以上、語るの用はあらざるべし—
長く其餘を語りつゞけて、人倦^うましむるは本意^{ほんい}ならず、
其時^{そのとき}この方、我れはコザックの客^{きやく}となれり。
彼等は荒野に、氣を失へる我を見出だし、
あたりの小屋に我を連れ込み、
再び我を生命にかへしぬ—
其^{その}我^{われ}や—他^た日^ひ彼^か等^らの國土^{こくど}をば、支配^{しはい}する爲^{ため}めたりしな

り。

此(十五)くて愚おろかのしれものども、たゞ其怒を壓おさかさんと、

我が苦痛にて精練し、

我を縛り、裸はだかにし、血を流し、又た唯一ひとり人、我を荒野

に逐おひやりて、

荒あ野のを變かじて、王座と爲なさしめたりしなり――

人誰か、己おのに定さまる運命を、想像爲し得る者やある。

さらば人々、決して落膽らくたんすることなく、決して失望しつぱうす

ること勿なれ。

明日、土耳其トルコの堤つたの上にて、

我等の馬は心安く、秣ま食くみ得る其さまを、

ボリステネースの河や見ん。

我等安けく、其處に到着する時は、

未だ嘗て、此くまで厚うき歡よろこびを、河なるものに、述ぶる

ことはあらざらん。

さらば、人々寝ねよかし。』

「語り終りて」酋長は、其身を伸ばして、樅まの樹蔭かげに横

へぬ。

木の葉の床は、前に已すでに作りあり、

かゝる寢床も彼に取つては、敢て不愉快なるにもあら

ず、又た新奇なるにもあらずして、
何處なりとも其は問はず
時來りなば何時にても、彼は其場に打臥して、
其眼は直に、嶮はしき眠を急ぐなり。
若し人、カロルス王が、彼れの爲したる物語を、
謝することを忘れしを、異しむことあらんとも、
彼れは敢て異しませぬ——そは一と時其前に、王は已に、
眠り居りしを以つてなり。
《をほり》

註
釋

- (一) ポルタワ戦争——瑞典王カロルス十二世魯西亞を
征して全敗を取りし戦争にて、此戦争にて、瑞典全く
勢力を失ひ、魯西亞は愈々勃興せるなり、時は紀元一
千七百九年。
(二) 「ツァール」——魯西亞帝ベロートル大帝なり。
(三) 他年一層今にもまさり——ナポレオンが魯西亞を
征せし時のこと
(四) ギエターカロルス王部下の大佐なり。

(五) ブケファロス—古昔グレシアの大王アレキサン
ドロスの愛馬にして、此馬に乗り得るは、たゞアレキ
サンドロス一人ありしのみ。戦地に常に伴ひ、ペルシ
アと印度の境、ヒダスベス河邊にて死し、こゝに葬る。
『汝がブケファロス……』とは、マゼッパと其馬との關係
に就いて云ふなり。マゼッパは大馬術家なればなり。
(六) スキチア人—此國は歐洲東北、亞細亞西北一帯
の古代の地なり。國人皆乗馬に有名なり。
(七) ポリステネース—ドニエベル河(ニール河)
の舊名。土耳其にてはウジ河と云ふ。

(八) チルジス—詩人テオクリツス及びキルギリツス
の詩中の牧羊者の名なり。田舎者の名を示めすなり。
(九) 「バラチン」—宮廷内の高位の官吏なり。
(十) 鹽礦銀山—此處に此くの如き句を出し來るは、
波蘭の此地方は是等のもの、産地にして、其所有者は
富者を示めす。
(十一) 其眼は實に亞細亞的—バイロン殊に亞細亞婦
人の黒眼勝を好む。
(十二) かゝる優しき情の事—カロルス王は一生婦女
子を近づけず、情を解せざりし人なり。

(十三) 鉛の熱湯云々——古代城攻め法の一種にして、
 屋根の上より鉛の熱湯を注ぐなり。
 (十四) スパルヒ騎兵——十四世紀土耳其にて組織され
 し騎兵隊にして其戦闘の方法や全く秩序なきものなり。
 「エニチエリー」軍と共に土耳其の軍隊の花なりき。
 (十五) 此くて愚のしれものども——前の「パラチン」の
 伯爵等を謂ふ。
 (十六) 土耳其の堤の上——之れボリステネース河の堤
 にして、當時此河露西亞と土耳其との境界なりき。

明治四十年二月二十六日印刷
 明治四十年三月六日發行

マゼツバ奥附

正價五十錢

著 譯 者 東京府下澁橋町柏木三〇九番地 木 村 應 太 郎
 發 行 者 東京府下澁橋町柏木三〇九番地 木 村 應 太 郎
 印 刷 者 東京市神田區松下町十番地 横 田 五 十 吉
 印 刷 所 東京市神田區松下町十番地 横 田 活 版 所

發 行 所
 發 賣 元

東京府下澁橋町
 柏木三〇九番地
 東京市神田區
 上白壁町九番地

眞善美協會
 二松堂書房
 振替貯金口座番號第三八一四番

木村鷹太郎氏重要著譯目錄

- プラトーン全集(第一、第二既刊 第三、第四、第五續出) 眞善美協會定價 一卷二圓五拾錢 二卷二圓八拾錢
- 東洋倫理學史(上卷既刊 下卷編纂中) 博文館 全一冊 貳圓八拾錢
- 西洋倫理學史 (博文館) 全 五拾錢
- 大日本建國史 (尙友館) 全 壹圓五拾錢
- 海賊 (同) 全 六拾五錢
- 鳴潮餘沫 (同) 全 六拾錢
- 萬國史 (同) 全 貳拾圓
- 西洋小史 (同) 全 八拾錢
- パリシーナ(バイロン原作) (同) 全 貳拾錢
- 日本主義國教論 (開發社) 全 四拾五錢
- バイ文界の大魔王 (大學館) 全 四拾錢

- ソークラス 人物養成譚 (同) 全 四拾錢
- 孔子、孟子 人物養成譚 (同) 全 三拾錢
- 荀子 人物養成譚 (同) 全 三拾錢
- 老子、列子 人物養成譚 (同) 全 三拾錢
- 莊子 人物養成譚 (同) 全 三拾錢
- 王陽明人物養成譚 (同) 全 三拾錢
- 眞善美 (第一卷、美の卷 文祿堂) 全 壹圓
- 眞善美 (第二卷、眞の卷 近) 全 壹圓
- 眞善美 (第三卷、善の卷 近) 全 壹圓
- 眞善美 (岡崎屋) 全 七拾錢
- 宇宙人生の怨 劇 (眞善美協會) 全 五拾錢
- 汗血マゼツパ 千里 (眞善美協會) 全 五拾錢

1/10/40

木村鷹太郎先生譯

プラトーン全集第二理想國

定價 貳圓八拾錢
小包料内國貳拾錢
製本堅固美麗
背一面の金模様

本篇は不朽の名篇「理想國」及び續篇「チマイオス」續々篇「クリチアス」等を收め眞善美合一の大理想
燦たる天体より、哲學、教育、政治、文學、美術、音樂、兵事、醫術、
法律等に至る宇宙大の知識を打ち一尙武尙
美の國家を出現せしめんと
博なる凡の學者凡の社會の青年男女の高尚健全なる而
好讀物として推薦す。女子兵役論等の愛嬌問題もプラト
女權論、女子共有説、女子兵役論等の愛嬌問題もプラト
忘れざりし、歐米古今精神界、文藝界、感化國を受けざる者なし。理想
學界政治界の偉人にして本書の感化國を讀まざる者は與に
語るに足らず

發行所

東京府下 淀橋町 柏木三〇九番地

眞善美協會

木村鷹太郎先生著

眞善美 美の卷

表裝羊皮背金文字入
高 雅 堅 牢
定價 金 壹 圓
郵 稅 金 十 錢

「眞善美」は木村先生の哲學、文學、美術、政治、教育、宗教、社
會、國家等各方面の問題に關する論文美文集なり。其破邪としては
雷霆の如く火山の如く、其靜思としては海面波なきの夜星辰燦とし
て之に映するの觀あり。其該博なる學識や東西古今雅俗に通じ其思
想や健全明晰其文章や春風の馳蕩たるあり秋骨の稜々たるあり。實
に學識を以つてするも感情を以つてするも文章を以つてするも世間
の所謂論文集等の類を抜て巍々然たるものなり。「眞の卷」「善の
卷」は續出す。

發賣所

東京日本橋區 樽正町一番地

文 祿 堂

パイロン作『カイン』●木村鷹太郎君譯

宇宙人生 の神秘劇 天魔の怨

一條莊伯畫表裝
極彩色優麗無類
正價七十錢
郵税六錢

ゲーテ評して空前の大作と言は此書にして剛復なる懷疑深玄なる
哲理を以て宇宙人生を大觀す、星斗燦たる天界陰鬱なる死界の逍遙
あり、樂園あり荒野あり、曉星あり夕照あり、惡魔あり美人あり、
宇宙の真相人生の意義、生死の覺悟色欲と生欲、人類の將來等の問
題は美麗なる戯詩として現る素より人類に對する同情の涙ありと雖
又た反抗的奮闘的態度を以て人生に處せんとする氣概の凜然たるも
のありて全體の構想言語や實に莊嚴雄大優美を極む宇宙人生の問題
本書に依て釋然たるものあるべし

發行所

神田區上白壁町九番地
神田區雄子町

一松堂書房
振替貯金口座番號四〇九
岡崎屋書店
振替貯金口座番號三八一四

パイロン原作
木村鷹太郎君譯

(訂正第六版)

海賊

クロース表装優美挿畫
表紙意匠等和田英作氏
パイロンの肖像挿入
正價金六十五錢
郵税金八錢

之高尚な思想を有する社會人類に溢さん一哲學者が忘恩嫉妬に
る所ありて身を海賊となし以て「我船」「我劍」之れ彼の權利「精進主義」
の朴の「思想の力」を以て我を服し以て海金波燦たる地中海岸丘上の
樓閣の瑟琴の和樂あり阿鼻吽喊劍戟の音天か焦が火炎あり、愛あ
り敵あり、さ、谿流あり狂瀾怒濤あり、鐵石冷たる哲學者海王に對
り夜又の如き天女の如き艶麗なる美熱烈なる戀愛あり、美にし力に富め
的大文學の宜なり原詩は發行即口譯者は「日本のパイロン譯文」一種の文體。
一萬四千部を賣り盡したるや、譯者は「日本のパイロン譯文」一種の文體。

發行所

東京神田美土代町二ノ一

尚友館書店

理學士 菅野皆可先生校閱 高村休松編 三月中發行

受驗者 最近幾何學要義

全一冊美本
定價金五拾五錢
郵稅金六錢

現今世に行はるゝ幾何學問題解義多くは初等幾何學の範圍に止まり其以上のものに至りては特に杜撰の譏を免れず先生爰に慨する所あり「リチードソレ」「ラムゼー」「ペテルセン」「コンブルス」諸大家の書につき近世幾何學を主とし傍ら平面・立體に關する緊切重要な問題に解決を與へらる若し夫れ論理の正確と用語の簡明とに至りては世間此書の右に出づるものあるを見ず本書の如きは世の幾何學を學ぶもの特に高等學校并に中等教員の檢定に應ぜんとするの士は必ず座右に備ふべき寶典なり

發行所

東京市神田區上白壁町九番 一 松堂書房
地振替貯金口座第三四〇九

理學士 大森千藏先生著

訂正 第五版 普通生理衛生學

洋裝美本全壹冊
正價金貳圓
小包料金拾錢

生理衛生の學は普通何人にも其一斑を如何せしめざるべからず又現今普通學科にとりては尤も重き一茲に置かざるべからず然るに世人の學科に比して甚だ重きを置かざるの憾あり是蓋し自から之を學ばず或は他に之を授くるに世上未だ適當なる良書なきに由らざる也

或は從來此種學問は特に醫家の專考に委ねしより偶々著名の作あらざるも卷帙浩濶所説深遠にして到底專門の士に非ざれば其解する能はず著者茲に概してとるあり多年泰西諸大家の書に渉獵し其粹を拔き其要を摘み以て本書を編纂せり此學の教授に従事せる人をして其考の資に供せしむるに在り又一般此學の趣旨を示し其生理上の學體構造の大意より其各部の解剖組織の概要を示し其次其生理上の學說より其衛生上の法則に及ぶ其兼ねて亦實驗法救急法等をも略其挿圖の精緻にして鮮明なる恐くは本書の右に出づるものなけん

發行元

東京市神田區上白壁町九番
振替貯金口座第三四〇九番

一 松堂書房

樞密院副議長 東久世通禧伯外二大家題侍歌
東京帝國大學理科大學教授三好 學氏題文
東京朝日新聞 産業部 主事記者海南小西和氏著

訂正
日本の高山植物

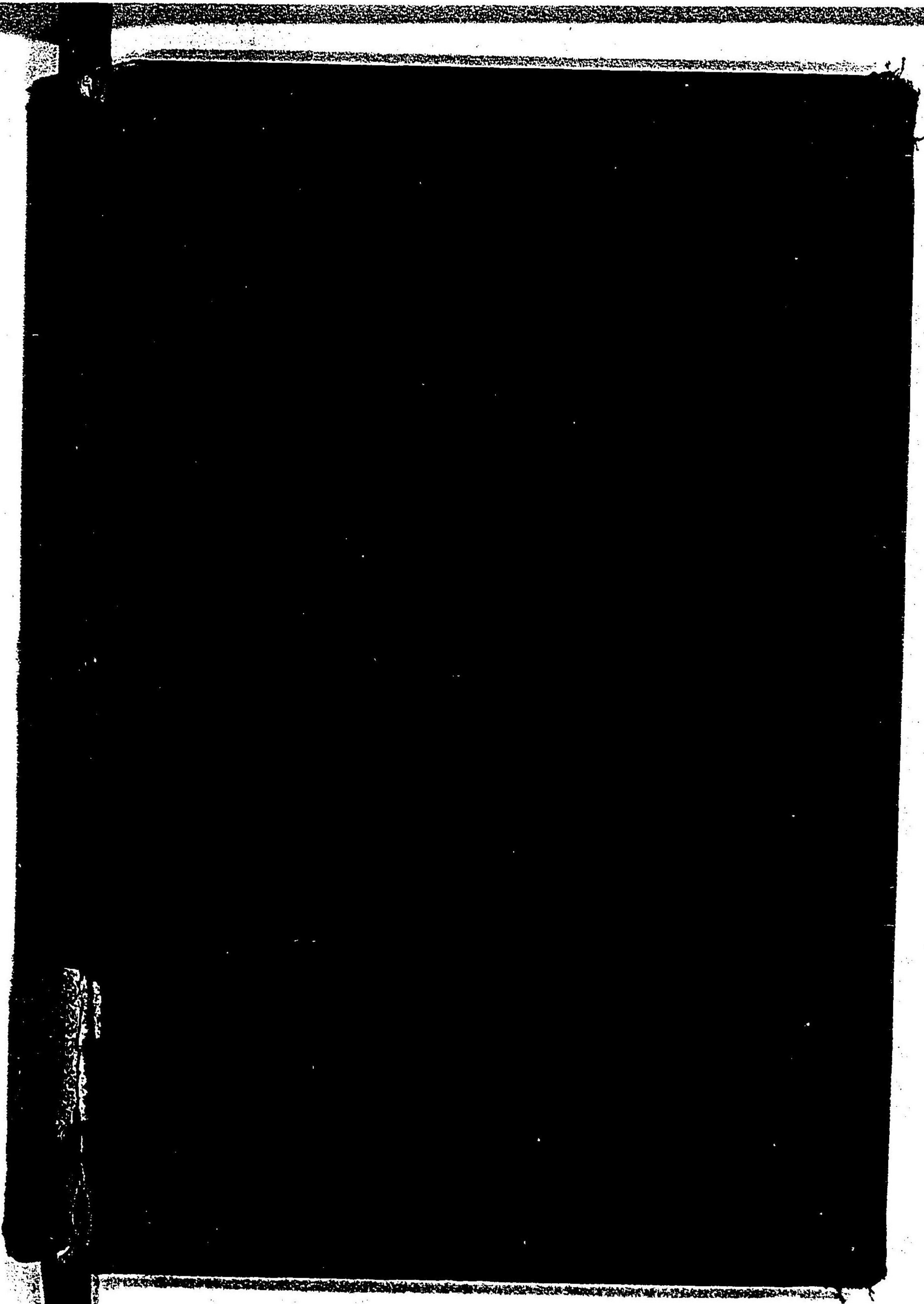
正價金四拾錢
郵税金四錢

◎大阪朝日新聞批評

本書は嘗て著者が東京朝日新聞の爲に稿を起せし日本に於ける高山植物に就ての意見を一卷に蒐め、更に増補と訂正を加へて袖珍用と小に表装したるものなり。其記述の方法は敢て學理の深遠に走らず又科學上の困難なる熟語を振り舞はさず、勉めて平易と簡明とを貴び、有意味の解釋を下して高山攀登者と高山植物採集者との培養者との便宜を與へんとするに在るもの、如し、編述のため参考とせし圖書豊富にして、製本亦中々ハイカラに出来上り、兎に角本の書は著者が實地に照して研究したる結果に成りしものにして、兎に角本の圖畫等が親切に描かれたり。従つて植物學の趣味を有する人々には良好の参考書たるべきなり。

發行所 東京市神田區上白曉町九番地 一松堂書房
振替貯金口座第三四〇九番

97
426



97
426

101375-000-3

97-426

マゼツパ

バイロン/著

M40

DBY-0708



